自閉スペクトラム者のエコラリアに込められた心情に着目したアプローチの検討

Examination of Approaches Focusing on the Emotions Embodied in the Echolalia of Persons with Autism Spectrum Disorder

新　田　順　子*　　井　澤　信　三**
NITTA Junko　　ISAWA Shinzo

自閉スペクトラム者（以下、ASD 者）には、コミュニケーションの困難さがあり（APA, 2014　日本精神神経学会 , 2013）、その一つにエコラリアが挙げられる。ASD 者のエコラリアは、他者に通じない非慣用的言語行動（廣澤 , 2013）として機能別に分類され（Prizant & Duchan, 1981）、意味があることがわかっていた。本研究では、エコラリアに込められた心情に着目し、ASD 者のコミュニケーションの困難さを取り除く実践的スキルにつなげるために、心情による分類を新たに試み、エコラリアに込められた心情とそれに応じた対応方法を明らかにすることを目的とした。エコラリアの表情、態度、繰り返し回数といった特徴から「高揚・笑顔・規制・不安」の４種類のエコラリアに仮定する分別を行なう「判別シート」と「対応シート」を作成し、効果検証を行なった。その結果、エコラリアに応じた環境調整および操作により、好転的な変化が見られた。対応変更で不穏になるなど状態は悪化せず、対応シートに基づく支援による心理的な負担軽減の効果が認められた。

キーワード：ASD，エコラリア，コミュニケーション，実践的スキル，心情
Key words : autism spectrum disorder, echolalia, communication, practical skills, emotion

Ⅰ．問題と目的

１．ASD 者のコミュニケーションの特徴

ASD は、社会的コミュニケーションの困難と対人関係を築くことの困難さがあり、行動、興味、または活動の限定された反復的な様式（常同的または反復的な身体の運動、物の使用、または会話において特定のパターンを繰り返す、限定され執着する興味、感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ）などの症状が２つ以上ある（APA, 2014　日本精神神経学会 , 2013, p26-29）。

米国精神医学会（APA：American Psychiatric Association, 2014）によると、ASD 者の重症度水準には、レベル１から３があり、レベル３では、非常に十分な支援を要する。レベル３における社会的コミュニケーションの困難さでは、「言語的および非言語的社会的コミュニケーション技能の重篤な欠陥が、重篤な機能障害、対人的相互反応の開始の非常な制限、および他者からの対人的申し出に対する最小限の反応などを引き起こしている」とされている（APA, 2014　日本精神神経学会 , 2013, p.29）。これは他者と意味をなす会話が成立しにくいことや、相互反応があっても人と人との距離感を掴めないといった困難さである。さらにこのレベル３における限局された反復的な行動とは、「行動の柔軟性のなさ、変化に対処することへの極度の困難さ、またはあらゆる分野において機能することを著しく妨げるような他の限局された反復的な行動、焦点または活動を変えることへの強い苦痛や困難さ」である（APA, 2014　日本精神神経学会 , 2013, p.29）。これは、日常生活の中において、物の置き場所が変わっただけでもパニックに陥ったりすることであり、ささいな変化であっても受け入れ難い苦痛を伴うといった困難さがあることを示している。また、レベル２でも十分な支援を要するとされている。さらにレベル１であっても「適切な支援がないと、社会的コミュニケーションの欠陥が目立った機能障害を引き起こす」という（APA, 2014　日本精神神経学会 , 2013, p.29）。これは、行動の柔軟性のなさが、１つ以上の状況で機能することに著しい妨げとなっていることや、切り替えの困難さ、組織化や計画の立案をすることへの課題があるなど、一定の支援を必要としていることを示している。

このような特徴を有する ASD 者への指導にあたり、櫻井（2018）は、ASD 者のコミュニケーション指導の研究動向を検討し、日常生活の中で活用できるような実践的スキルを獲得できる指導の必要性を述べている。

２．エコラリアに関する先行研究

ASD 者の発話には特有の言語行動がある。それが、アニメやコマーシャルのセリフを繰り返したり、他者から言われた言葉をそのまま返したりするエコラリアである。

エコラリアには、ASD 者それぞれの意味があり（Kanner, 1943）、機能的な使い方の個人的な違い、意図があり（Prizant & Rydell, 1984）、意図を捉えることができず二者間のコミュニケーションが成立しない可能性が高い（廣澤 , 2013）。すなわち、エコラリアは、非常

＊EduCue合同会社
令和４年７月12日受理
＊＊兵庫教育大学大学院学校教育研究科特別支援教育専攻障害科学コース 教授

に特異な意味をもち、型にはまらず、コミュニケーションにならない言葉のやりとり（Prizant & Rydell, 1984）で、廣澤（2013）によるとそれは、“非慣用的言語行動”であり、即時性エコラリア、遅延性エコラリア、保続的発話、絶え間ない質問を含んだ多様な機能がある。Prizant & Duchan（1981）は、即時性エコラリアの7つの機能（無焦点型、発話順番型、叙述表現型、自己統制型、リハーサル型、肯定表現型、要求表現型）を明らかにした。そして、それらエコラリアが無意味な行動ではなく、エコラリアを繰り返すことを軽減させる介入プログラムを提案する研究者が、エコラリアがASD者にとって重要なコミュニケーションおよび認知機能を果たすことを見落としている可能性があると指摘している。

さらに、Prizant & Rydell（1984）によると、遅延性エコラリアには14の機能があり、相互作用的（だれかと）なものと非相互作用的（ひとりで）なものがある。相互作用的なものには、やりとり（交互に話すこと、言葉の受け答えをするもの）、ルーティンの完了（決まった動作や日課などを完了させるためのもの）、相互作用的な命名（相手とのやりとりをする上で、特定の物を指し示しながら伝えるもの）、情報提供（自分が知っていることを相手に知ってほしくてするもの）、呼びかけ（相手に気づいてほしいもの、注意を引くもの）、肯定（活動に従事する、受け入れる意欲や願望を示す）、要求（何かしてほしいとき、物や食べ物を得るためのもの）、抗議（不満の声明、行為の禁止を求めるもの）、命令（何かを指示したいなど、他者に行動を起こさせるもの）がある。非相互作用的なものには、無焦点的（意図が明確ではないもの）、関連づけ（人や場面、行動が引き金となって起こるもの）、リハーサル（事前に行動を示すもの）、自己指示（自分を自制するためのもの）、非相互作用的な命名（ひとりでするもので、特定の物を指し示しながら伝えるもの）がある。

このようにエコラリアには、先行研究においてASD者それぞれの意味や意図が込められているとされ、その意味や意図が示す機能面に着目した分類がなされていた。エコラリアの機能とは、ASD者にとって重要な役割を果たす可能性があるもの（Prizant & Duchan, 1981）で、固有の役割に着目した研究であった。

廣澤・田中（2008）は、非慣用的言語行動にも本来は意味があり、ASD者とのコミュニケーション手段として積極的に利用するためには、関わり手が意味を見いだすことの重要性を指摘している。エコラリアには固有の役割があって、他に置き換えることができない。そして、その存在に意味があり、その意味を見出すのが関わり手である。小山は、「即時性エコラリアは、前言語期、象徴機能出現前期に見られ、即時性エコラリアが見られる事例の方が言葉の出現が早い。さらに、即時反響言語にみられる抑揚の単調さは、基本的信頼をおく他者との間での子どもにとっての快の情動的交流によって抑揚を豊かにし、その後の自発的発話につながっている」（小山, 2010, p. 2）と述べている。

エコラリアは、子ども同士や親子間、あるいは教員や支援者といった他者との交流によって、情動的交流を生じさせる。三宅・伊藤（2002）は、情動の伝染を媒介として大人と子どもが楽しさを共有する情動的交流遊びが、コミュニケーション指導に有効であると述べている。

これらのことから、エコラリアが示す意味を見出し、エコラリアを制止せずに、積極的にコミュニケーション手段として利用することが、情動的交流を生じさせ、自発的発話につながり、ASD者のコミュニケーションの困難さへのアプローチとなると考えた。

3．エコラリアの心情に着目する意義

先行研究において、エコラリアは機能別に分類され、意味や意図があることが明らかとなっていた。しかし、支援者が、エコラリアに機能や込められた意味や意図があることを知るだけでは、コミュニケーションの困難さを取り除く方法には至らない。ここで必要となるのが、前述した櫻井（2018）が述べたような実践的スキルであった。

廣澤らによると「即時性エコラリアの生起に関わり手の発語が関与している」、さらに「他の先行研究の多くでは、エコラリアは、ASD児の個体内要因によって生起すると考えられている」（廣澤・田中, 2008, p. 188）と述べている。このことは、エコラリアには機能があり意味や意図があるものの、内的要因や他者の影響を受けて変化することを示唆していた。他者の影響の一つには、他者とのコミュニケーションがある。エコラリアが他者に通じて伝達できると、コミュニケーションツールとしてその役割を果たす。そしてそのエコラリアに込められた心情は、喜びの感情として表出される。しかし、他者に通じず伝達ができないと、役割を果たすことができない。この果たせない役割も、悲しみや苦しさとして表出できずに、心情としてエコラリアに込められる。

そこで、エコラリアの機能面に着目するだけではなく、内的要因や外的要因によって変化が見られる、言語としては表出しないエコラリアに込められた心情に着目し、エコラリアの発言時の表情や態度などの変化から規則性を捉えることが、指導や支援の場での実践的スキルにつながると考えた。

4．本研究の目的

以上より、本研究では、エコラリアを積極的にASD者のコミュニケーション手段として用いるために、心情による分類を新たに作成し、エコラリアに込められた心情とそれに応じた対応方法を明らかにすることを主たる目的とした。就労継続支援B型事業所[1]に所属するASD者の事例の観察記録からエコラリアの心情を整理分類し、エコラリアと心情の関係を明らかにし、エコラリアを心情別に分ける「判別シート」と、その種類に応じた対応方法を示した「対応シート」を作成することを目的とした。そして、そのシートによって心情の種類

ごとに対応方法を変え、その変化を検証した。

Ⅱ．研究1：エコラリアの特徴と分類ならびに、エコラリア判別シート及び対応シート仮作成のための調査

1．目的

本研究では、ASD 者が発するエコラリアが、心情を理解するためのコミュニケーションツールとして意味をなすものであると捉え、エコラリアの分析を通して、エコラリアと心情の関係を明らかにするために、エコラリアをその特徴ごとに分類し、その特徴から心情の種類別に分ける「判別シート」と、その種類に応じた対応方法を示した「対応シート」を仮作成することを目的とした。判別シートは、ASD 者がエコラリアを発する際の表情や態度そして発したあとの家庭での様子などから作成した。対応シートは、そのエコラリアが見られた際に、家族が行っていた対応方法を参考に作成した。

2．方法

1）調査対象者

調査対象者は、就労継続支援 B 型事業所に通う 22 歳（男性）の知的障害を伴う ASD 者 A であった（以下､A）。

2）調査対象者のアセスメント情報

（1）幼少期から成人までの経過：A の保護者の記録によると、出生時には特に異常が見られず、首座りや寝返り､つかまり立ちまでは順調な生育が見られた。生後1ヶ月ごろには、あやすと笑顔で応えるといった反応も見られていた。生後 3 ヶ月ごろに体を反らす行動が記載されており、その当時通っていた小児科の医師にも指摘を受けたとの記載があった。手を絡ませて遊んだり、玩具も握ったりする行動が生後 2 ヶ月半ごろから見られ、生後 5 ヶ月で寝返りができた。生後 7 ヶ月でハイハイをはじめ、生まれてからちょうど 8 ヶ月目につかまり立ちをして､3 ヶ月後に支えなしで立てるようになった。1 歳 2 ヶ月ごろには指差し行動や、わずかな発語が見られるが、以降発語の進展が遅く、電車、車などの単語が少しという状態が長く続いた。1 歳 1 ヶ月で立てるようになったが、歩くことができたのは 1 歳半を過ぎてからであったため、1 歳半で健診を受けているが異常なしと診断されていた。「機械につよい、形の認識が際立ってよい、目で見る力が強い」と母親の認識ではあるが、視覚的情報処理能力が高い様子が記載されていた。3 歳では「語尾だけを言う」との記載があり、4 歳では「衣服の着脱や自分の名前が言えない」「ケンケンができない」「自分が経験したことを話せない」「はさみを上手に使えない」「友達とごっこ遊びができない」「歯磨き、口ゆすぎが自分でできない」との記録があった。これ以降､言葉を使ってさまざまな物事を文章として表したり、読んだり、意味を理解するといったことに発展させることができず、積極的発語が見られるようになったのは 10 歳ごろからであった。記憶力と視覚的情報処理能力は優位に高い傾向を示す記載が多く残されており、過去の記憶は月日に至るまでを記憶していた。また、好きな路線の電車や飛行機の分野において、型式番号や特徴、車両の入れ替え履歴といった詳細なエピソードと結びつけて解説することができた。写真や絵言葉カードを使用すると 196 カ国の国旗を瞬時に記憶することができた。

小学校と中学校での特別支援学級では、日々のスケジュールや作業手順、物の置き場所などで構造化が行われ、可能な限り変化を減らすことで安定した学校生活が送れていた。幼少期では保護者や教員によって行われる構造化であったが、高等学校に進学する頃からは、部屋の中の物の配置など自ら納得のいく構造化を提案し行えるようになった。このように日常生活のほとんどは安定した暮らしができていたが、目にするニュース映像や突発的な変化に対しては、不安感が高まる傾向があった。そのようなときは、簡単な言葉で保護者や支援者が説明をするが、なかなか理解に至らず、時折不安感が高まりすぎてパニックをおこすことがあった。

（2）調査対象者のエコラリアの状況：エコラリアの出現は幼少期からあり、幼少期は即時性エコラリアがほとんどで、種類は少なく、繰り返しの回数も本研究開始時よりずっと少なかった。中学校のころから遅延性エコラリアが多く見られるようになったが、アニメをみて一人でセリフを繰り返すだけで、“話す”ことよりも、DVD などで同じ場面を繰り返し“見る”ことがほとんどであった。

日常生活の中でのエコラリアは、今よりも回数が非常に少なく穏やかなものだけであった。エコラリアが激しくなりだしたのは高等学校に入ってからであり、他者に対して返答を求めるものも高等学校に入ってからであった。

22 歳となった現在では、日常生活で口にする言語の 8 割以上がエコラリアであり、遅延性エコラリアのみが見られた。その内容は、日本語、英語、広東語など複数の言語を用いて、主に機関車トーマスやアンパンマンなど幼児向けアニメのセリフや、電車や飛行機の型式型番や路線に関するものであった。特徴的な点は、母親や親しい支援者に対するエコラリアでは、そのほとんどが返答を求める「絶え間ない質問」であり、職場や作業場面では、絶え間ない質問より、返答を求めない独り言が多い傾向であった。

（3）新版 K 式発達検査 2001 等の結果：2019 年、20 歳のときに新版 K 式発達検査 2001 を受けており、認知･適応領域は DQ：46（DA：8 歳 2 ヶ月）、言語・社会領域は DQ：40（DA：7 歳 2 ヶ月）、全領域では（DA：7 歳 7 ヶ月）DQ43 であった。

3）調査場面

調査場面は、A の自宅リビングなどで行なった。

4）調査期間

調査期間は、2021 年 2 月であった。

5）倫理的配慮

倫理的配慮として、調査前に本人・保護者に対して本調査の概要を伝え、書面及び口頭により同意書を得た。

また、調査の中断、内容の確認がいつでも可能であることを伝えた。保護者には、個人情報の保護及びデータ管理の仕方、論文掲載時には個人を特定できないように配慮すること、さらに調査研究内容を公表することについて同意書を得た。本人に対しては、さらに、本研究においての内容や方法説明の際、可能なかぎり視覚的な情報で伝えた。また、変化によるストレスを軽減するために周辺環境の構造化を行い、介入時間も１日２時間程度までとした。

６）調査手続き

自宅で生起していたエコラリアと発言時の表情と態度、そして背景事象（例えば、リビングを独占している、家族が電話中など）について、母親が「記録シート」に記録した。記録シートに記載された内容については専門家のチェックを受けた。また、母親は、エコラリアを含めたASDのコミュニケーションの特徴や支援についての理解があった。この記録シートには、繰り返し発する言語と、その発言時の対象児の表情や様子、発言後の表情の変化などの項目が記載できるようになっていた。

７）分析方法

自宅ではマスクをしていないため、表情を的確に捉えることができた。それによって、エコラリアを表出しているときのほとんどが、楽しそうに笑う表情か不機嫌な表情で占められていることがわかった。そこで、エコラリアを表情ごとに分けて、多動さなど、それぞれどのような違いがあるかを分析した。

エコラリアの種類や数は、感情とそれに伴う情動の側面から考えた。喜びや怒り、そして悲しみなどの感情には、情動が伴う。感情は言葉で表出できるが、ASD者の場合はそれが困難であることが多い。情動には、心拍があがったり発汗したりといった生理的変化を伴い、さらに、表情変化や多動さなど身体表出が見られる。そのため表情変化や多動さといった表出した情動が、ASD者一人一人の喜怒哀楽の感情を含めた心の中の思い、心情を理解する手がかりとなると考えた。さらに福田は、「原始的な情動は、快・不快の２種類から、基本（コア）情動は、喜び、受容・愛情、恐怖、怒り、嫌悪の５種類から成り立っている」（福田 , 2012, p. 5）と述べている。

このことから、“快”である愛情や喜びといった情動の身体表出のひとつである笑顔を特徴とするものを「笑顔を伴うエコラリア」とした。そして、“不快”である恐怖や怒りなどにより現れる、眉間にシワを寄せる表情や落ち着きのなさ、といった身体表出を伴うものを「多動や不機嫌さを伴うエコラリア」とし、この対極的な２種類を基本とした。そして、情動は独立しているのではなく、相互に関連している（円環モデル）ことから（Russell, 1980）、快が高まりすぎて不快に達する特徴が見られたエコラリアをその２種類とは別にすることが適切な対応をするために重要であると考え、笑顔を伴うエコラリアの中で高揚感のあるエコラリアを分け「高揚のエコラリア」とした。さらに、必ず規制を意味する言語が伴う特徴が見られたエコラリアを、「規制を意味する言語を伴うエコラリア」とした。以上より、実践的スキルに必要となるエコラリアの種類を特定し、判別するエコラリアを４種類として分析をおこなった。

そして、４種類の判別を行う際には次の項目に対して確認を行なった。表情では「口角があがり、同時に目元もにっこりと曲線を描く笑顔の有無」「眉間にしわの有無」「首を傾げて目を細める行為の有無」により行なった。多動か否かの判定は「室内移動を繰り返す行為の有無」によって行なった。声のトーンは普段の話し言葉との比較により「裏声になっているか」「口調の速さとキツさ」で行なった。

３．結果及び考察

自宅で生起していたエコラリアを調べると、エコラリアに表情や態度などの特徴があることがわかった。この特徴などから「高揚、笑顔、規制、不安」の４種類のエコラリアを仮定して分類する「判別シート」を仮作成し、自宅での対応方法を参考に「対応シート」を仮作成した。また、支援者が、心情ごとのエコラリアの特徴を手順にそって捉えやすいように、「判別シート」と「対応シート」をチャート式にした。

１）家庭での行動観察の調査の結果

（１）笑顔を伴うエコラリア：ASD者が、必ず楽しそうな笑顔とともに生起していたエコラリアは、以下のとおりであった。「アンパンマン」「NHKの幼児向け番組」、そして「機関車トーマス」のうち「トップハムハット卿」以外のセリフ、さらに「ジブリシリーズ」のセリフを繰り返すエコラリアであった。このエコラリアは、笑顔、あるいは必ず穏やかな状態のときに生起していた。また笑顔とともに笑い声をあげることも多く、時折、それが高揚し、声のトーンが跳ね上がる様子が見られた。

（２）行動の規制を意味する言語を伴うエコラリア：このエコラリアには、口角が下がり、眉間にしわをよせた不機嫌な表情といった特徴があり、多動であることが多かった。最も特徴的なことは、生起するエコラリアが、「静かに」など、自らの行動を規制する言語を繰り返すものであったことと、他のエコラリアと違ってアンパンマンや機関車トーマスなどキャラクターのセリフではないことであった。

（３）多動や不機嫌さを伴うエコラリア：このエコラリアは、口角が下がり、眉間に深いしわをよせた不機嫌な表情を伴い、さらに、首をかしげることも多くあった。行動を規制する言語を伴うエコラリアとの違いは、声のトーンが非常に高いこと、かなりイライラした様子があったこと、また、非常に多動であること、目つきがいつもと違って鋭い様子に変化していた点であった。さらにその発言内容が特徴的で、機関車トーマスの登場人物の中でも「トップハムハット卿」のセリフがほとんどであり、特にトップハムハット卿が他の機関車を叱責しているときに発する言葉であった。

２）エコラリアの特徴と分類について

（１）笑顔を伴うエコラリアの検討：笑顔を伴うエコラ

リアでは、目と口角が同時に動き、口角は上がり、目は半円形に細くなっており、笑い声を伴う特徴があった。そのため、このエコラリアを、「笑顔のエコラリア」とすることが適切であると考えた。また笑顔のエコラリアの中で、高揚感のあるエコラリアには高まりすぎて不快に達する特徴が見られたため、「高揚のエコラリア」とすることが適切であると考えた。

（2）行動の規制を意味する言語を伴うエコラリアの検討：このエコラリアには、行動の規制を意味する言語を伴うといった特徴があった。例えば「静かに」と、発言を規制する言語からは「話したい」という思いをおさえて「静かにしなければいけない」というルールを守るために緊張している状態であることがわかる。我慢をしていることは、ストレスが高い状態である。このエコラリアを発しているときに起こる様々なネガティブな感情は、抑圧的な状況から生じると考えられた。これらのことから、この特徴を有したエコラリアを「規制のエコラリア」とした。

（3）多動や不機嫌さを伴うエコラリアの検討：このエコラリアの特徴は、普段穏やかなASD者が語気を荒げ、眉間にしわをよせ、目つきもするどくなり、感情の昂りが見てわかる点にある。また、口角が下がり、首を傾げる行為を伴うことも多く、繰り返しの回数が多くなり、声のトーンが高くなる傾向があった。怒り、恐れ、喜び、悲しみなど、比較的急速に引き起こされた一時的で急激な感情の動きである情動を伴う。また、発言するその言葉には、「ハイパー」や「ブラック鉄骨」など、激しさや刺々しさのある言葉を含むことが多い点や、その発言をしているキャラクターが誰かに対して叱責している場面で使用するセリフであるという特徴があった。

怒りは二次的な感情であり、一次的な感情には悲しみや寂しさ、不安といったネガティブな感情がある。事前調査の中でAの会話のほとんどはエコラリアのみであり、怒りの表出と確定できる言語行動が見られなかったことから、表出されていない心情と捉えて「不安のエコラリア」とした。さらに対応シートは、実際にそれらエコラリアに対して自宅で行うと効果的だった方法を参考に仮作成を行なったため、本作成を通じてその効果を検討した。

Ⅲ．研究2：エコラリア判別シート及び対応シート本作成のための調査

1．目的

自宅での調査によって仮作成した判別シートと対応シートを、職場で行なった調査によって検証し、本作成を行なうことを目的とした。

2．方法

1）調査対象者とアセスメント情報

研究1と同じであった。

2）調査場面

某市就労継続支援B型事業所で実施した。作業場所は2箇所あった。1箇所目は、事業所の室内で、主な作業は、健康食品をサンプルシートに貼り付けることであった。2箇所目は、事業所が所有する農場で、主に行う作業は、無農薬の野菜（黒豆）を選別することであった。

3）調査期間

2021年2月から3月で、連続7日間の調査期間を設けた。

4）倫理的配慮

研究1と同様に行い、さらに事業所の担当者および経営者にも書面および口頭により同意書を得た。

5）調査手続き

Aが所属先で担当している作業場面において、発しているエコラリアと発言時の表情、態度、そして背景事象（例えば、同僚を気にしているなど）について調査を行なった。調査は、5年ほどAの就労支援を担当している支援者（男性）が行い、「記録シート」に記録し、内容については専門家のチェックを受けた。表情に関する記述はコロナ禍により常時マスクをしていたため、目の印象（半円形になっている）などによって判断した。支援者は、普段、Aの作業を見守り、必要に応じて資材の追加を行い、作業手順を指導する業務を担当していた。記録シートには、繰り返し発する言語と、その発言時の対象者の表情や様子、繰り返しの回数、発言後の変化などの項目が記載できるようになっていた。

3．結果及び考察

職場での観察記録から、エコラリアに使用される言語の特徴（刺々しさや、キャラクターのかわいらしさ）と、Aの表情や態度、繰り返しの回数といった特徴において、マスクによる影響があるものの、自宅調査における特徴と概ね一致した。そして、調査7日目には、不安のエコラリアから規制のエコラリアになり、さらに笑顔のエコラリアになるといった変化において、判別シートによる結果と記録シートに示された内容とが一致した。このことから、エコラリアを発言する際の表情や回数、そしてエコラリアの言葉の印象において、判別シートに示した内容が概ね適切であることが確認できた。

1）職場での調査結果

1日目の前半は、ほとんどの表情が穏やか、笑顔であり、エコラリアの回数も少なかった。ときおりややテンションの高いエコラリアが見られた。前日夜と当日朝に保護者が調査時の流れを説明しており、当日は非常に落ち着いた状態でスタートできた。2日目は、エコラリアの種類が少なく、同じエコラリアを繰り返すものであった。とぎれとぎれではあるが、同様のエコラリアを足すと回数がかなり多く、多動さと声のトーンが高い様子が継続してみられた。3日目は、エコラリアがない1日であったと記録されていた。日常生活でも時折このような1日が見られ、エコラリアがない日は多動さもみられないといった特徴があった。4日目もエコラリアの種類は少なかった。作業には集中していたが、回数が多く、

トーンが高かった。この日は「ブラック鉄骨」のエコラリアが見られず、同僚の作業を自ら積極的に手伝う様子が見られた。5日目は、開始直後から、自宅で不機嫌な状態のときに見られるプラレールのファイアーライナーのエコラリアがあった。トーンも高く、早口で、眉間にしわもあったが、繰り返しの回数がやや少なかった。支援者の記録から、この日はときおり「不安のエコラリアであると感じた」との記載があり、表情が硬かったり、イライラしていたりする様子が記録されていた。6日目は、アンパンマンのエコラリアが特徴的で、穏やかで落ち着いた様子が多かった。7日目は、いつもの屋内の作業場所ではなく、屋外にあるハウスでの黒豆選別の農作業であった。毎週金曜日はこの畑で、いつものメンバーではなく畑組のメンバーと合同で作業を行っていた。開始早々からトーンが高く、不機嫌で、多動さが目立ち､回数の多いエコラリアが連続していた。特に｢ブラック鉄骨バイキンマン」のエコラリアが開始早々から継続的に見られた。記録シートによると、表情は「表情少し硬め」や「普通」と記載されていたが､「逃げる」や､「うろうろ」といった言葉が見られた。そして、ある一人の同僚の姿を目で追いながら作業を行っている様子が記録されていた。A は以前、この同僚から「発言がうるさい」と注意を受けたことがあった。姿が見えなくなると落ち着いて作業にとりかかるものの、近づいてくると逃げる様子が見られ、その同僚の動きとともにエコラリアが変化していた。(Table 1 参照)。

2）職場における調査の判別シートの結果

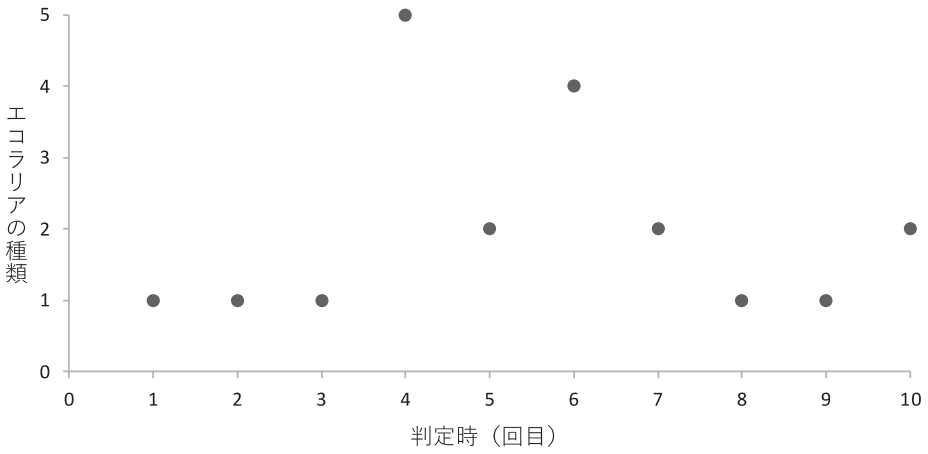
1日目は、判別シートでは笑顔のエコラリアが多く、作業終了前には、高揚のエコラリアが見られた。繰り返しの回数や笑顔などの特徴は一致していた。2日目は、判別シートによると高揚のエコラリアとの判定が多かった。3日目はエコラリアが見られない1日であったため分析は行っていない。4日目は、判別シートによると、笑顔と高揚のエコラリアが多い1日であった。5日目は､「プラレールハイパーガーディアン」が特徴的で、これは不安のエコラリアであると判定された。6日目には一転して、笑顔と高揚のエコラリアの1日で、判別シートによる結果と記録シートから受ける明るい印象は一致していた。7日目は､判別シートの結果によると、苦手な同僚が近づいた際には不安のエコラリアが出現し、離れた際にそれは消失し、笑顔のエコラリアへと変化していた。さらにその同僚に叱責されないように「静かに」と規制をかけるエコラリアが出現していた。判別シートによる判定結果（Fig.1 参照）と記録シートの内容において、一致する様子が確認できた。

3）エコラリア判別シート及び対応シートの本作成について

「笑顔のエコラリア」の特徴は、我慢も嫌な気持ちもなく、心からの楽しい気持ちを表すものであることが示唆された。特徴的なことは「笑顔」である点だが、その笑顔は、口角が上がるだけではなく、それと同時に生起するにっこりとした目元の変化および笑い声によって

Table 1　職場での調査7日目の記録シート

番号	繰り返し言葉	発言の前にあった行動、出来事	対象児、者の表情	対象児、者の態度	発言後の変化	特記事項（回数）	その他何かあればご記入ください
1	ブラックてっこつバイキンマン　１８回	ハウスに到着し一度着席して仕事にむかうがすぐハウスの外に出る	声はトーン高め、表情少し固め、早口、。	そわそわうろうろ歩く		ブラックてっこつマシーンがときどき入っている１１回	このマシーンでパワーアップしてと、①をしている。５回　９：５０
2	ブラックてっこつホラーマン	ハウスに入る	穏やか普通	早口でしゃべりうろうろ			①、②が混じっている１０：００
3	ブラックてっこつバイキンマン　４回	ハウス内をうろうろしながらエコラリアしている	穏やか普通	早口でしゃべりうろうろ	着席し仕事に向かう、が無言ではなくあまり集中していない。バイキンマンエコラリアを伴う		再び①のエコラリアがハウス内で仕事中に出る　１０：００
4	ホラーマン次はお掃除よ　２４回	着席して仕事。そこへストーブをつけにきた同僚が近づいたので、逃げる	穏やか普通	同僚から逃げる	また再びハウスをうろうろ歩く	同僚がいなくなると着席し仕事される	なかなか長く続かずすぐまたうろうろ　１０：０２-１１
5	よかったね元に戻って、本当にどうなることかと思いましたよ　２４回	同僚が収穫のサラダほうれん草をとりにハウスの奥に行く。同僚が離れた。	落ち着いている穏やか	落ち着いて仕事に向かっている	落ち着いて手を動かしじっくりとりくんでいる		１０：１２-２０
6	ホラーマン次はお掃除よ　４回	仕事に取り組んでいる。周囲も静か。本人も仕事の手が早く終わらせようと全集中	落ち着いている穏やか		落ち着いて仕事している	黙々と作業している。机上の仕事提示された枝を終わらせようと黙々と頑張っている。	終わらせなくちゃという自己規制　１０：１７-２０
7	そしてこれからもプラレールハイパーガーディアンは　４回	１１時の休憩５分前。ハウスにある時計を見にいく立席	穏やか、柔らかい、集中	鼻歌、ゆっくり歩く	時計確認後、そのままハウスないをうろうろ、仕事に向かわず	ハウスの時計針１１時休憩を気にされ、うろうろ、１１時になるも無言で仕事継続	鉄道警備隊ハイパーガーディアンの歌を歌っている１０：５５
8	ホラーマンにお任せください　６回	休憩に入り５分後に立席し、ハウスないをうろうろ	変化なし	仕事を止める。うろうろ歩く、ホラーマンをつぶやきながら	そのままハウスの外に出てうろうろ		11:05
9	ホラーマンにお任せください　７回	みなさん１１時ですよピーと本人が全体に向かって声かけをしてくれる	穏やか、口調は優しい、ポツポツ発言	何かつぶやきながらハウス前を歩く	継続してハウス前のスペースをうろうろ、ホラーマン関連のつぶやき	まだ机上に本人の未脱穀の枝が残っている。わりとたくさん	１１：１０-２２
10	俺様お腹ぺこぺこ　４回						他のエコラリアの間にこれを１フレーズいれるという使われ方



縦軸：　１高揚　２笑顔　３エコラリアなし　４規制　５不安のエコラリア
横軸：エコラリアを判定した時

Fig.1　判別シートでのエコラリアの変化

判別できた。エコラリアの内容にも特徴があり、アンパンマンなど明るいキャラクターの笑顔を伴うセリフや優しい言葉が多かった。

次に「高揚のエコラリア」の特徴は、高まりすぎる感情を自己調整していると考えられた。自己調整能力とは、子供が保育所や幼稚園に入園することにより、それまでとは異なった環境、社会的場面への適応が求められ、そこでの様々な経験を通して獲得するものである（山本 , 1995）。つまり、自己調整能力は、幼児期に発達する。A の発達年齢が、発達検査の結果から７歳から８歳であることからも、高揚のエコラリアを繰り返し生起することは、自己調整力の発達につながると考えられた。そのため、可能なかぎり無理に静止せず、見守り、どうしても音量を下げる必要のあるときにだけ「音量をさげようね」と声かけをすることが大切であろう。

「規制のエコラリア」と「不安のエコラリア」には共通点があった。不機嫌で多動であるという特徴であるが、大きな違いは、規制のエコラリアでは我慢をしているためネガティブさが高まり、不安のエコラリアでは、思うままに動いたり、言語によって感情を表出したりすることで我慢をしていないことが推測できた。

ポジティブさとは、喜びや安堵といった感情を含み、積極的であるさまを示す言葉である。また「不安のエコラリア」ではネガティブさがあり、ネガティブさには悲しみや怒りといった感情を含み、否定的で消極的なさまを示すものである。このことから、肯定的でストレスを感じにくく幸福感が高まりやすい「笑顔のエコラリア」には、作業や課題を増やすといった負荷をかけても、賞賛を得られ幸福感を得やすいことが考えられた。これに対して消極的な状態である「不安のエコラリア」は、負担を増すのではなく、減らすことや苦しさの原因を取り除く環境調整を行うことが適切であると考えられた。このことから、対応シートの仮作成時に参考とした自宅での対応が、適切であったことが示された。

不安のエコラリアによる急速な情動である怒りへの対応として、不安要因を取り除いたり、気分転換を行

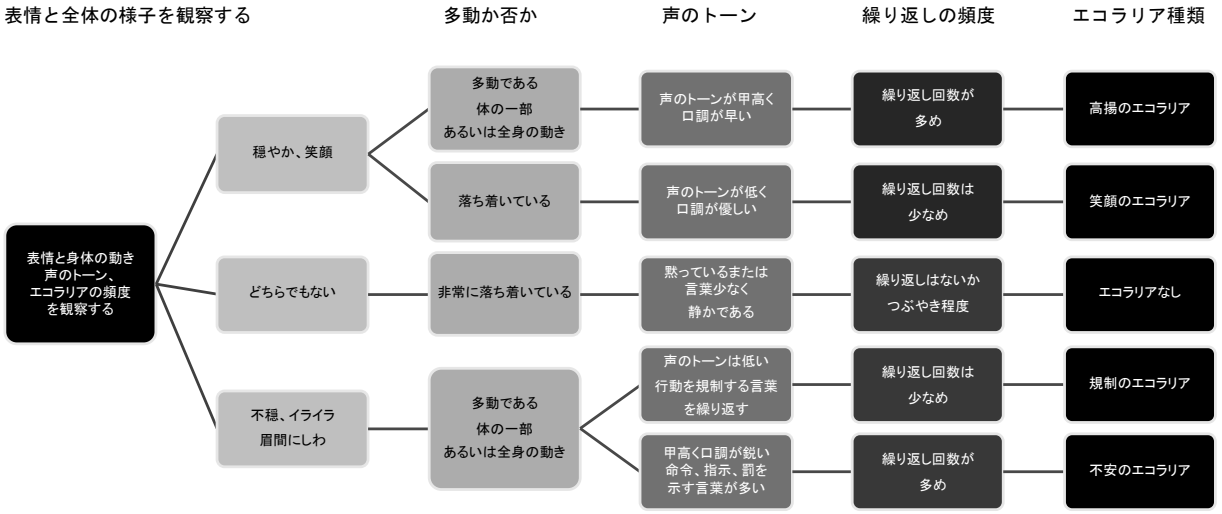


Fig. 2　エコラリア判別シート

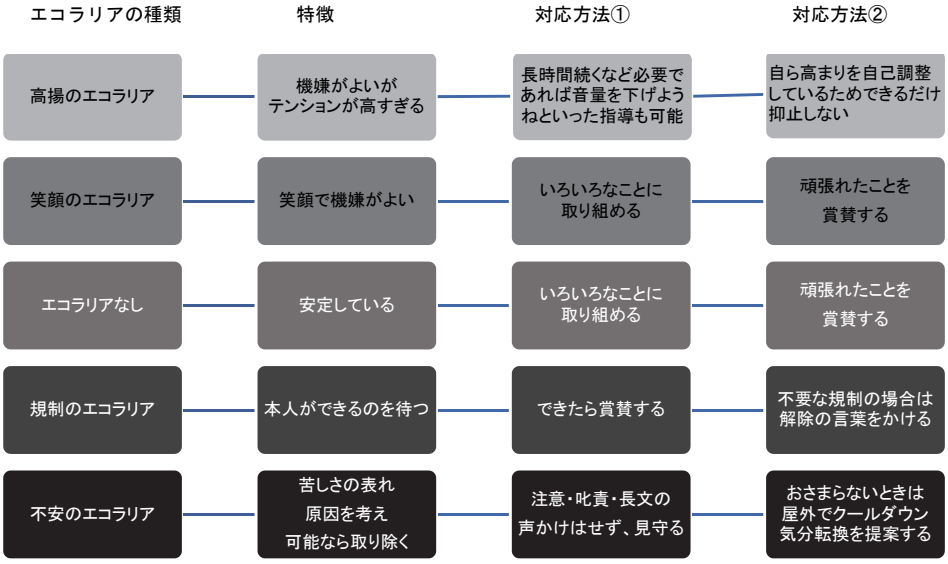


Fig. 3　エコラリア対応シート

なったり、といった環境調整でおさまらない場合には、屋外に出るなどのクールダウンを、支援者もしくは本人の希望に沿って行うとしていた。このことについて、怒り、恐れ、喜び、悲しみなどが、比較的急速に引き起こされた一時的で急激な感情の動きである情動であるという側面からも、興奮している神経や筋肉を鎮静させる働きがあるクールダウンは適切であると考えた。

以上の結果から、仮作成していた判別シートと対応シートの内容を改めて検討し、本作成を行なった（Fig.2及びFig.3に各シートを示した）。本作成した判別シートは、次の4項目をシートに沿って判定できるようになっていた。①表情と身体の動き、声のトーン、繰り返しの頻度を観察する。②多動か落ち着いているかの状態を観察する③声のトーンの高さ、口調の速さや鋭さなどの状態を観察する。④エコラリアを繰り返す回数（多い、少ない）を把握すると、エコラリアの種類が特定できるようになっていた。さらに対応シートは、判別シートによって分けられた4種類のエコラリアごとに、特徴や環境調整、操作などの対応方法を示した。

Ⅳ．研究3：ABデザイン[2]による対応シート及び判別シートの効果の検証

1．目的

研究1で作成した汎用型のエコラリア判別シートと対応シートに基づく支援の効果、検証を目的とした。

2．方法

1）調査対象者とアセスメント情報

研究1と同じであった。

2）調査場面

Aが所属する就労継続支援B型事業所の作業場面において行なった。

3）研究デザイン及び手続き

ABデザインによって行なった。

（1）ベースライン：ベースライン（7日間）では、指導や支援方法、環境調整などの変更を加えなかった。支援者は、作業開始時に一定量をデスク近くに用意しており、Aの手元にサンプルシートなどの材料がなくなると、本人の意向（追加作業をするかどうか）を聞いて次の材料を追加していた。支援者には記録シートを用いて、エコラリアと作業量や背景事象の記録を依頼した。

（2）介入期：介入時（3日間）には判別シートに従い、エコラリアを4種類に判別し、判別したエコラリアに対して対応シートを用いて、環境調整・操作を行った。具体的には、作業量は調査を経て決定した基本量を100とし、増減は10単位ずつ行い、10単位ごとに付箋をつけ視覚化し、本人に知らせた。そして、「笑顔のエコラリア」に対しては、作業量を10単位ずつ追加する操作を行なった。「不安のエコラリア」に対しては、作業量を減量するか、不安要因を取り除く環境調整を行った。介入時には、Aに増減の可否を問い、無理強いはしないよう配慮した。介入のタイミングはエコラリアを判別した直後とした。

4）評価方法

（1）作業量：健康食品のサンプルシートを作成する作業での評価は、サンプルシートを作成した枚数によって行った。100枚を基準量とし、そこから介入によって変化する10単位ごとの増減を記録した。笑顔のエコラリアには枚数を増やし、不安のエコラリアには枚数を減らす、あるいは不安要因を取り除くなどの変更を行うこととし、サンプルシートの枚数と環境調整の内容を、支援者が記録した。

（2）エコラリアの種類毎の生起状況：生起したエコラリアを判別シートによって判定し、その生起状況を支援者が「記録シート②」に記録した。この記録シートには、開始前の表情、作業内容、作業数量の増減数、作業時間、表情変化などの項目が記載できるようになっていた。

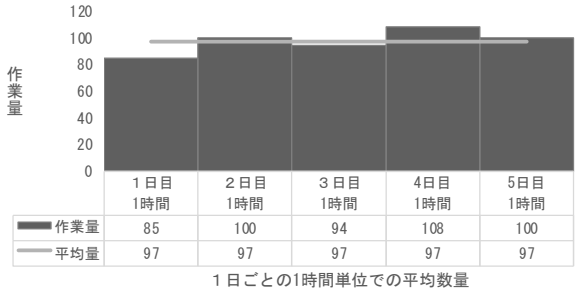


Fig.4-1 ベースライン時の作業量推移

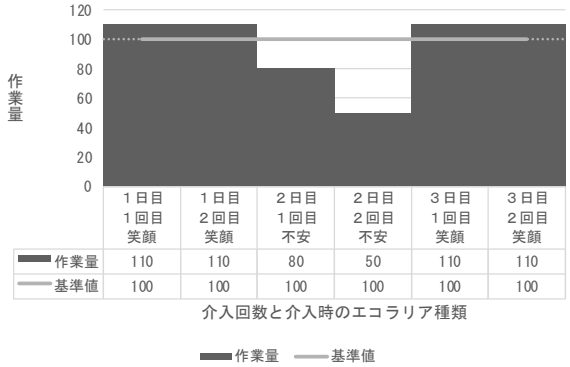


Fig.4-2 介入時の作業量推移

3．結果

Fig. 4 に介入前の作業量と、介入時のエコラリアの変化と作業量の推移を示した。笑顔のエコラリアでは、青粒のサンプルシートの枚数を増やす提案を行っても、「うん！いいよ」と笑顔で答え、積極的に追加した作業に取り組むことができた。不安のエコラリアでは、発言後にサンプルシートを減らすと好転的な変化が見られた。笑顔のエコラリアでも、不安のエコラリアでも、対応変更によって、不穏な様子が見られるなど状態の悪化はなかった。

1）介入 1 日目の結果

介入 1 日目のはじめのエコラリアは、判別シートによって笑顔のエコラリアと判別できた。そこで、支援者がサンプルシートを増やす提案を A にしたところ、快く承諾し 10 枚を追加することができた。また、その後 2 度目の介入を実施したところ、同様に作業量を増やすことを快諾し、支援者が追加した 10 枚をこなすことができた。

2）介入 2 日目の結果

2 日目は天候が悪く、嵐の 1 日であった。A は雷が苦手なため、嵐であることは大きな不安要因であった。朝から不安のエコラリアが継続して見られたため、支援者は作業量を 10 枚減らすことを提案した。しかし、1 度目の介入時には、A 本人が 20 枚減らすことを求めたため、20 枚減らして作業を継続した。枚数を減らしたあとも、状況は変わらず、外の嵐の様子を気にしており不安感が強い状態が続いていた。それでも作業量を減らした後の残り 80 枚の作業はきっちりこなすことができた。2 度目の介入時も不安のエコラリアが継続して見られたため、支援者は再び、10 枚減らすことを提案した。このときも、A がさらに作業量を減らすことを求めたため、A と相談をして半分の 50 枚にした。A は、その 50 枚を手早く終了させ、その後エコラリアの変化が見られ笑顔のエコラリアとなり、大幅な減量による操作で好転的な変化が見られた。

3）介入 3 日目の結果

3 日目、A は朝から快調で、笑顔のエコラリアが見られた。支援者が作業を増やす提案をすると快諾したため、作業量を 10 枚増やした。2 度目の介入時も同様であったため作業量を 10 枚増やした。作業後も笑顔のエコラリアが継続して見られた。

4．考察

1）判別シートの考察

支援者が判別シートの項目に沿ってエコラリアの種類を特定することができた。エコラリアの種類に応じた介入を、発言直後のタイミングで支援者が適切に行うには、事前に判別シートの流れを記憶しておき介入時の依存度を低くする必要があることがわかった。さらに、判別シートの項目には、笑顔のエコラリアでは、口角があがり同時に目元がにっこりとした形に変わるといった、喜びや楽しさという感情をともなう笑顔の見極め方を詳細に追記することが必要であるとわかった。また、1 次的感情か 2 次的感情によって命名するのかといった、命名の統一性への検討が必要である。

2）対応シートの考察

本研究によってわかった最も重要なことは、不安のエコラリアには、その発言の制止や否定的な言語による対応が適さず、対応シートを用いて対応方法の変更や、環境調整をすることで状態の改善が見られた点である。また、調査 3 日目には、エコラリアが見られなかったと支援者は記録シートに記載していた。調査期間中において、エコラリアがなかった日はこの日だけであるが、自宅でも時折、同様の 1 日が見られた。エコラリアがない日は、非常に静かで、部屋の中を動き回ることもなく、パニックを起こすこともなかった。笑顔、高揚、規制、不安のエコラリアが生起する際には、必ず何らかの情動がある。そのため、エコラリアがないという状態は、海でいうと風がやみ、波が穏やかになる凪の状態であると考えられた。A は幼少期には積極的な発語が少なく、小学生の頃から即時性エコラリアが見られたものの、その言葉数は少なかった。小学生高学年から中学生の間には、エコラリアのない凪の状態がよく見られた。やがて、即時性エコラリアがなくなり、遅延性エコラリアが多くを占めるようになるとともに、めったにこの凪の状態が見られなくなっていた。エコラリアの変化は、ASD 者の言語発達とも関係していることから、遅延性エコラリアの増加とともに自発的な発語が生起することが増え、その発語が他者に通じるコミュニケーションとして発達が進むと、この凪の状態が増えるのではないかと考え

た。

これらのことから、判別シートによって判別されたエコラリアが、対応シートに沿って種類ごとに決められた対応方法に変更する環境調整につながり、その効果によって作業量を増やしたり、笑顔のエコラリアに変わるといった、好転的変化につながることがわかった。以上より、気分がよいときには、自らの意思で積極的に作業を増やし、それによって「よくできました」と賞賛を得られたことによって強化できることがわかった。

Ⅴ．参考文献

Allen, J. G., Fonagy, P., Bateman, A.W.（2008）. *Mentalizing in Clinical Practice. American Psychiatric Publishing,* Inc., The United States, 狩野力八郎（監修）, 上地雄一郎・林創・大澤多美子・鈴木康之（訳）（2014）メンタライジングの理論と臨床―精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合 . 北大路書房 , 2-367.

American Psychiatric Association（2013）. *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders.* American Psychiatric Association, Washington D.C. 日本精神神経学会（日本語版用語監修）高橋三郎・大野裕（監訳）（2014）DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き . 医学書院 , 26-29.

福田正治（2012）. 感情階層説―「感情とは何か」への試論―. 研究紀要（富山大学杉谷キャンパス一般教育）, 40, 1-22.

廣澤満之・田中真里（2004）. 自閉性障害児における即時性エコラリアに関する研究の展望 . 東北大学大学院教育学研究科研究年報 , 52, 249-259.

廣澤満之・田中真里（2005）. 自閉性障害児の非慣用的発語に対する関わり手の反応・理解変容過程 . 日本特殊教育学会 , 第 43 回大会発表論文集 , 402.

廣澤満之（2013）. 自閉性障害児の非慣用的言語に対する保護者の理解 . 目白大学人文学研究 , 9, 245-259.

廣澤満之・田中真里（2007）. 自閉性障害児における即時性エコラリアの生起関連要因－関わり手の発語に着目して－ . 東北大学大学院教育学研究科 , 研究年報 , 55, 185-198.

廣澤満之・田中真里（2008）. 非慣用的言語行動を多用する自閉性障害児に対するかかわり手の発語の分析 . 特殊教育学研究 , 45（5）, 243-254.

Kanner, L.（1943）. Autistic Disturbances of Affective Contact, Nervous Child, 2, 217-250.

小山正（2004）. 言語発達の諸相 . 小山正･神土陽子（編）, 自閉症スペクトラムの子どもの言語･象徴機能の発達 . ナカニシヤ出版 , 21-36.

小山正（2010）. エコラリアの発達的意義―その時期にみられる物への志向性と他者のことばの自己化―. 発達心理学会 , 第 22 回大会シンポジウム , エコラリアの意味を問い直す―発達支援のために―.（https://www.jsdp.jp/contents/iinkai/group/pdf/devlang2010.pdf）,（ 最終確認日 , 2021 年 12 月 13 日）.

三宅康将・伊藤良子（2002）. 発達障害児のコミュニケーション指導における情動的交流遊びの役割 . 特殊教育学研究 , 39（5）, 1-8.

Prizant, B. M., & Duchan, J. F.（1981）. The functions of immediate echolalia in autistic children. *The Journal of speech and hearing disorders,* 46（3）, 241–249.（https://doi.org/10.1044/jshd.4603.241）

Prizant, B. M., Rydell, P. J.（1984）. Analysis of functions of delayed echolalia in autistic children. *Journal of Speech and Hearing Research,* 27, 183-192.

Russell, J. A.（1980）. A Circumplex Model of Affect. Journal of Personality and Social Psychology, Vol.39, No.6, 1161-1178.

櫻井貴大（2018）自閉症スペクトラム児を対象としたコミュニケーション指導に関する研究動向 . 岡崎女子大学研究紀要 , 51, 97-106.

山本愛子（1995）. 幼児の自己調整能力に関する発達的研究２―幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について―. 教育心理学研究 , 43, 42-51.

1　雇用契約による就労が困難であるものに対して、就労の機会の提供などを行う事業所のことである。厚生労働省 , 障害者の就労支援について , https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000797543.pdf,（2022.9.14 確認）

2　シングルケースデザインのことで、少数個体のデータをもとに独立変数と従属変数間の因果関係の検討を行う実験法である。井垣竹晴 ,「シングルケースデザインの現状と展望」行動分析学研究 , 第 29 巻 , 2015, p. 175